

と人生における利子の役割 (5/7) : 明と理

:

明: 去の思想家たちが、利子の存在について 々な 明を捏造した みについて。

目: [事イスラ ム的システム](#)

より: ジャマ ルツ=ディ ン ザラボゾ (2011 IslamReligion.com)

日 07 Nov 2011

集日 07 Nov 2011



尊敬される著名な 学者たち

による、信 ある と 点を伴った利子の 明、そしてその支 いの正当化を みる洪水のような 意 の数々は、何かが っているのではないかという、人々へのしるしであると言えるの ではないでしょうか。 思想史においては、利子の正当化を みる以下のような理 を 出す ことができます:

1. 「色」 (ベ ム バヴェルクによる呼称) : これはアダム スミス、リカ ドなどの 初期 学者らによって提唱されました。この理 は、 本の粗利益と利子を混同するな ど、多くの欠点がありました。リカ ドはさらに、すべての 本利益を に 属させまし たが、彼はなぜか、主 される の支 いを受け取るのは 者ではないことに が付きませ

んでした。

2. 制：このような理は、れては消えて行きました。学者たちは「制」が「待」（マシヤル式）のようなの意味合いを持つ言にたびたび化するため、した言ではないことに付きました。[2](#)

利子の本とは、人が即座の消を「待」または「制」することにより受け取る料金のことです。この理は、事に反して金が利子の一能であると捉えたために破しました。

生：この理の推者たちは、生こそが本において固有のものであり、それゆえ利子とはにその生にする支いであるとしします。セイにより提唱されたこの理は、本が余を生み出すことを想定しますが、その主を支持する根は存在しません。主することの出来ることとしては、本にするとしてが生することですが、彼らによる利子の正当化の本のように、余や超分がり出されたことを明することは出来ないのです。のことながら、利子を分析するとこれらの理が金的要素を完全にしていることが分かります。

使用：「ベムは、各本の他に、独立したを有する独立したによる『使用』があったという想定のを否定しました。彼はさらに、初めから本の独立した使用というものはただ存在せず、したがって独立したを有することもなく、それに寄与することによる『余の象もない』ことをしました。そのような使用を想定することは、すべての事と矛盾する不当な虚を捏造することなのです。[3](#)

酬：このを支持する学者たちは利子について、本家の「生活」にする酬であるとします。英国、フランス、ドイツの学者によって支持されてはいますが、この理にするコメントは必要ないでしょう。

折衷（生と制のみ合わせ）：これについて、アフザルツ＝ラフマンはこのようにしています：

この解の起源は、去と在の 学者によって提示 された利子の学 に不 を呈したことに端を
したようです。この主 においてはただひとつの も 得行くものが得られなかったため、
人々はいくつかの の要素を み合わせて の解 に めたの4です。

近代 : ヘンリ ジョ ジがこの の提唱者ですが、 体が薄いために、全くと言って良い
ほど追 者が れませんでした。

修正 制 : シェルウィ ンにより提唱された独特の理 でしたが、ほとんど影 力を持ち
ませんでした。

オ ストリア (打 または 差) : これはベ ム バヴェルク自身が提唱した理 です。この
によると、利子は「 在と将来の の 格差により 生する」とされます。カッセルはこ
の の な批 をしています。 局は高 な「待 」に ぎませんでした。

通 (付 金、流 性 好、 数量、アセット アプロ チ) : 最近になり、 学者たちは利
通 の要素を取り入れて するようになりました。しかし には、なぜ利子が支 われる
のか、という点から、 果的な利子率を定めるものは何か、という点に移行して来
ています。「ロバ トソンによると、流 性 好 における利子は、 に するリスクプレミ
アムに ぎず、私たちはそのことについて 信さえ得ていません。それは利子を宙に
浮かせるものに ぎません。」[6](#)

この と同じ分 の他 も、似たような批 を受けています。

取 : 社会 学者は、利子は 取以外の何でもないと常に なして来ました。 本 の「 始者
」であるアダム スミスとリカ ドは、あらゆる商品 の根源は 量であると唱えました
。もしそれが真 なら、あらゆる支 いは に して支 われるべきであり、利子は 取以外
の何でもないことになるのです。

数の 所において、アフザルツ＝ラフマ ンは利子に する 々な理 に しての卓越した を きだ
しています。彼はこう述べています：

利子という 象における 史的 展の批 的研究により、利子は生 のある独立した要因
に して支 われることが示されていますが、それは待、延期、 制、使用などとは

呼ばれません。しかしこれらすべての は、なぜ利子が支 われるべきなのかについて答えられておらず、 明もされていないのです。一部では待 について、また一部では 制や延期の必要性について指摘しますが、それらのいずれも の答えを提供してはいないのです。待 や延期、または 制の必要性も、あるいは 本の生 のなる使用でさえ、 本生 に する雇用の支 いに利子が必要であることを 明するには至らないのです。その上これらの は、いかに する要素が利子率のような固定された要素を 定するのかについてさえも答えられていないのです。どうしてそのような を合法化、または支持できるでしょう？

に、彼はこう しています：

限界生 同 、通 は、なぜ利子が支 われるべきなのか、という に答えようとする みすらしていないのです。それらは にこの を して に逃避しているのです。それらは 本の 格は他の全てのもの同 に、需要と通 の供 によって 定されるのであると述べます。しかし、それらはあたかも は交 の 、そして利子 は分配の といった基本的な二つの の いを忘れてしまっているかのようです。

付 金 、流 性 好 はどちらも基本的には利子の需要と供 に する であり、付 金と通 それぞれの需要と供 についての 明をするものです。しかし、それは利子 象を正当化するものではありません。たとえ 本が富の 造に する寄与から 切な 酬を受ける 利があるとしても、「それは 加した国家の富の中から寄与した分だけしか分け前を得ることが出来ないのです。それはあらかじめ められた量のものしか受け取れず、 の生 量とも なの です。」

ベ ム バヴェルクによると、これらすべての理 の研究から、「分岐する三つの重要な利子 の概念が明らか」になりました。生 を代表する第一グル プは、利子 を生 として捉えます。取 を主唱する社会主 者は、利子 を分配 として捉える第二のグル プ、そして通 を支持する第三グル プは、利子 を として捉えます。利子 象としての浸透性から勘 いされていますが、これらすべての が、なぜ利子が支 われなければならないのかについては 避け けてきたことに疑いの余地はありません。彼らは待 や 制、あるいは生 性や 、 の制定についての にすべての 力を やしはしましたが、利子制度の起源や正当性に しては完全に口をつぐんできたのです。

Footnotes:

1 事 上、 思想の 史に するどのような教科 も、利子の正当化に する分析とその批 を提供します。好例としてはマ
Economic Theory in Retrospect (Cambridge: Cambridge University Press,
1978)が げられるでしょう。ベ ム バヴェルクの名著 *Capital and Interest*
(本と利子) は、初期の 々な利子 に し い非 を浴びせますが、彼自身の理 も同 の欠 を有します。ベ ムは初期の
や矛盾、そしてなぜ利子を支 い、また何が利子率を定めるのかについての 明の欠如を 出したのです。参照: Qureshi
1-39; Afzal-ur-Rahman, pp.9-48.

2 シニアによる 制 は、「社会主 者作家ラサ ルによって存分に揶揄されています: 『 本による利益は “ 制の 料” であ
は喜 的な、金では えない表 である。インドの修行僧、または登塔者のようなヨ ロッパの禁欲 万 者たちは、柱の上
で立ち、うな垂れ、青ざめた 子で人々に真っ直ぐ腕を伸ばして器を差し出し、その 制による 料をもらおうとしている
。その真中で仲 たちの 上を び けている、禁欲主 の修行僧の番 、ロスチャイルド男爵であるかのように。』」 Qureshi
17.

3 Afzal-ur-Rahman, p. 23.

4 Afzal-ur-Rahman, p. 30.

6 Afzal-ur-Rahman, p. 44.

8 Afzal-ur-Rahman quoted this Ahmad, *The Economics of Islam*.

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/546>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。